様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２６ 日現在

機関番号：２３９０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ１０３１７

研究課題名（和文）術後せん妄予防のための看護介入プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of Nursing Intervention Program for preventing postoperative delirium

研究代表者
石光　芙美子（Ishimitsu, Fumiko）

愛知県立大学・看護学部・准教授

研究者番号：００４５３４５７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：超高齢社会の日本では、認知機能が低下した患者が全身麻酔下の手術を受ける機会が増加している。本研究では認知症とせん妄患者への看護に卓越性を有する看護師（専門看護師と認定看護師）22名にZoomによるインタビューを実施し、認知機能が低下している患者に対する術後せん妄ケアの様相を抽出した。
結果、＜一定の関わりによる認知機能の把握＞、＜安楽な環境の提供＞、＜認知機能の程度に応じた継続的なリアリティオリエンテーション＞、＜認知機能が変動する患者に対する意図的な見守り＞、＜患者が生きてきた背景に基づく関わり＞、＜手術前の情報を用いたせん妄のアセスメント＞、＜認知機能の変動に応じた薬物調整＞が生成された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
せん妄に関連した死亡率が約20年前と変わらないという事実が2020年に発表され、せん妄ガイドラインで推奨されたケアをいかにベッドサイドで提供できるかが、現在、喫緊の課題として検討されている。本研究で抽出されたカテゴリーは、せん妄管理の基本原理との共通性から説明することが可能であり、ガイドラインで推奨されている非薬物療法的せん妄ケアと実際の場で行われている術後せん妄ケアの間を繋ぐための知見として有用であると思われる。とりわけ超高齢社会にある日本では、本知見は認知機能が低下した患者の術後せん妄ケアの質向上に必要な知見として活用可能であり、ひいては術後認知機能障害の予防へとつながることが期待される。

研究成果の概要（英文）：In Japan, a super-aging society, the number of surgical patients with cognitive decline undergoing general anesthesia has been increasing. In this study, we conducted Zoom interviews with 22 nurses (Certified Nurse and Certified Nurse Specialist) who have special nursing skills for dementia and delirium patients, and extracted perioperative nursing aspects of postoperative delirium care for them.
As a result, the following categories were extracted. <Understanding cognitive function through constant involvement>, <Providing a comfortable environment>, <Continuous reality orientation according to the status of cognitive function>, <Intentional involvement for patients with fluctuating cognitive function>, <Relations based on understanding of the patient's living background>, <Assessment of delirium using preoperative information>, and <Pharmaceutical adjustment according to changes in cognitive function>.

研究分野：クリティカルケア看護

キーワード：術後せん妄　周術期　術後認知機能障害　看護介入　プログラム開発

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

周術期医療の発展とともに高齢者に対する手術適応が拡大し、レセプト情報・特定健康等情報データベースによると、高齢者に対する全身麻酔件数の増加は著しく、2017 年度では 150 万件を超えているとの報告がある。超高齢社会にある日本では、今後、認知機能に低下のある患者や認知症患者が、全身麻酔下の手術を受ける機会は増加することが予測され、これまで以上に安全で質の高い高齢者周術期管理が必要とされている。

しかし高齢者は認知機能や身体機能の低下のために、術後の回復に時間を要することが多く、さらに近年では、周術期合併症として術後神経認知異常（PONDs）が注目されている。これは手術や麻酔を受けた高齢患者に多い術後合併症の一つで、手術を契機に生じる認知機能障害の総称である。特に術後せん妄を発症した患者は、この術後神経認知機能障害の発症率が高いという疫学調査の知見から、術後認知機能障害の予防には術後せん妄の予防および発症後の重篤化回避に向けた対策は必要不可欠である。

術後せん妄は手術を契機に発症する一過性の意識障害で、注意障害などの症状が短期間で急激に出現し、1 日のうちでせん妄の程度が変動するなどの特徴を持つ。認知症患者では非認知症患者に比べ 2～5 倍せん妄になる危険視が高く、さらに軽度認知機能障害患者においては 3～4 倍せん妄になる危険性があるとされ、これらの独立した危険因子を有する患者では、とりわけ周術期にわたるせん妄ケアが必要となる。国内外のせん妄ガイドラインでは非薬物療法的せん妄ケアがせん妄の予防および対処に一定の効果を有するとし推奨しており、術後せん妄においても、その約 40%以上が簡単なベッドサイドでの支援によって発症を予防できることが報告されている。

しかしせん妄に関連した死亡率について、約 20 年前と変わらないという事実が 2020 年に発表された。この知見は国際的にも注目され、現在、ガイドラインで推奨されたケアをいかにベッドサイドで提供できるかが、喫緊の課題として検討され始めている。また関連して注目すべき点は、このようなガイドラインで推奨される非薬物療法的せん妄ケアと、臨床現場におけるせん妄ケアとの間には、看護師のケアへの取り組みやせん妄への認識などのギャップが存在するとの指摘があることである。この指摘に対し、米国周麻酔期看護師協会はせん妄ケアの質について、患者の Q.O.L や機能の促進に影響を与えるケアの構造およびプロセスが必要であることを前提に、ガイドラインで示された推奨事項をベッドサイドケアとして実施するためには、せん妄ケアプランが必要で、そこには個々の非薬物療法的せん妄ケアを実践するためのアウトラインと、一定レベルの介入を詳細に記述していることが必要であり、それらがケアの連続性を可能にするであろうことを提言した。すなわち、非薬物療法的せん妄ケアを臨床現場で定着させるためには、様々な状況に置かれた周術期患者を前に、看護師がその状況を捉え理解し、アセスメントした上で必要とされる術後せん妄ケアを実践するという一連のケアプロセスの言語化が不可欠であることを意味する。そこで本研究は認知機能が低下した患者やせん妄患者への看護に卓越性を有する看護師を対象に、これまでの周術期看護の経験において、認知機能の低下が疑われる患者を前に術後せん妄ケアの必要性を捉えた状況から、実践したケアに至るまでのプロセスの様相を明らかにすることを目的とする。本知見によって、ガイドラインで推奨されている非薬物療法的せん妄ケアと実際の場で行われている術後せん妄ケアの間を繋ぐことができれば、術後せん妄ケアの質向上が期待でき、ひいては術後認知機能障害の予防へとつながることが期待される。（研究課題申請当初は術後せん妄への看護介入プログラムを開発し、その検証にあたる計画としていたが、新型コロナ感染症拡大の影響により研究課題を前述の如く実施可能な内容へと変更した。）

２．研究の目的

認知機能が低下した患者やせん妄患者への看護に卓越性を有する認知症看護認定看護師および老人看護専門看護師が、これまでの周術期看護の経験において認知機能の低下が疑われる患者を前に術後せん妄ケアの必要性を捉えた状況から実践したケアに至るまでのプロセスの様相を明らかにすることとした。

３．用語の定義

１）ケアのプロセス

ある臨床状況に直面した看護師が、その状況の理解（インプット）から必要とされるケアを思考し（プロセス）、患者にケアを実践する（アウトプット）という一連のプロセス。なおケアとは看護師単独の看護実践のみでなく、多職種との連携のもとチーム医療として実施するケアも含む。

２）認知機能が低下した患者

認知症であることを医学的に診断された患者だけでなく、軽度認知機能障害のように診断されていない状態であっても認知機能の低下が疑われ、医療者がその患者と関わる上で特別な対

応を必要としている患者全てを含む。なお認知症の場合、疎通性が障害されていると介入は難しいとの指摘もあることから、本研究における認知機能が低下した患者は、疎通性が可能である患者とした。

４．研究方法

１）研究デザイン

質的記述的研究。

２）対象

本研究の母集団は認知機能が低下した患者やせん妄患者への看護に卓越性を有する認知症看護認定看護師および老人看護専門看護師のうち、周術期看護に携わり、術後せん妄看護の実践経験を有する看護師 15 名程度とした。2021 年時点で日本看護協会ホームページに、所属と氏名を本人の同意のもと公開している認知症看護認定看護師と老人看護専門看護師を抽出した。次に所属する施設が総合病院である看護師を抽出したリストを作成し、認知症看護認定看護師と老人看護専門看護師の両者が所属している施設を抽出した。これらの施設の所属部門長宛てに、研究の趣旨および方法、倫理的配慮を記載した研究協力依頼・説明書等を郵送により送付し、研究協力に承諾いただける場合は、所属部門長から本研究の対象として該当する看護師へ、研究協力に関する書類一式を渡してもらい、最終的には該当する看護師本人から研究者宛てに同意書の返送によって同意の意思を確認した。

３）データ収集方法

(1)方法

新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、研究者が容易に医療機関を訪問しインタビューを行える状況ではないため、Zoom によるオンラインでインタビューを行った。研究参加者 1 名につき 60 分程度の半構造化インタビューを、研究者 1 名がすべて実施した。またインタビューの内容は音声のみを IC レコーダーに録音した。

(2)内容

半構造化インタビューはインタビューガイドを用いて実施した。なおインタビューを開始する前に、「患者とは周術期にある患者で、術前から認知機能の低下がある、あるいは疑われた患者」であり、「せん妄ケアとはせん妄の予防ケアから発症後のケアまで全てを含み、看護師単独で行うケアだけでなく、チーム医療において行うケアも含む」ことを説明した。インタビュー時間が予定の 60 分を経過した時点で、研究者と参加者がともにインタビューの収束を確認できているかを確認し、インタビューを終了した。

４）分析方法

質的な内容分析の手法を用いて帰納的に分析した。逐語録全体を繰り返し読み、対象者が語っていることは何かを再度確認しながら、周術期看護においてせん妄ケアが必要であると捉えた状況からその実践に至った術後せん妄ケアプロセスについて述べられたデータを抽出した。抽出したデータの内容を見比べ相違点や共通点を確認し、カテゴリー化を行った。

５）倫理的配慮

本研究は愛知県立大学研究倫理審査委員会からの許可を受け実施した（受付番号：看 2021-09）。

５．研究成果

１）対象者の概要

研究参加に同意の得られた対象者は 22 名で、老人看護専門看護師が 9 名、認知症看護認定看護師は 13 名であった。1 名あたりのインタビュー時間は平均 53 分であった。

２）結果および考察

結果の記述については代表的なカテゴリー（＜＞）のみ示す。術前におけるケアとして＜一定の関わりによる認知機能の把握＞、＜安楽な環境の提供＞、＜認知機能の程度に応じた継続的なリアリティオリエンテーション＞が生成され、一方術後には、＜認知機能が変動する患者に対する意図的な見守り＞、＜患者が生きてきた背景に基づく関わり＞、＜手術前の情報を用いたせん妄のアセスメント＞、＜認知機能の変動に応じた薬物調整＞が生成された。

これらの帰納的に生成されたカテゴリーについて、一般的に述べられているせん妄管理の基本原理（「誘因を特定し治療すること」、「回復のための状態を最適化すること」、「合併症を管理して予防すること」、「患者の苦痛を軽減すること」、「介護者とコミュニケーションをとること」、「ハイリスク患者のせん妄を予防すること」）との共通性から、認知機能が低下した患者に対し実践されている術後せん妄ケアの様相は次のように説明されうると考える。術前において、看護師は患者や介護者とのコミュニケーションをとることで＜一定の関わりによる認知機能の把握＞を行い、在宅から病院へと環境の変化に伴い生じる患者の苦痛を＜安楽な環境の提供によって＞軽減し、＜認知機能の程度に応じた継続的なリアリティオリエンテーション＞によって、ハイリスク患者のせん妄を予防している。また術後には、＜認知機能が変動する患者に対する意図

的な見守り＞によって、手術からの回復のために状態の最適化をはかり、＜患者が生きてきた背景に基づく関わり＞により、手術前とは異なる心身が変化した患者の苦痛を軽減しようと支援している。また患者の認知機能の変動に対し、＜手術前の情報を用いたせん妄のアセスメント＞により誘因の特定と治療を行い、＜認知機能の変動に応じた薬物調整＞によって、生じる得る合併症の管理と予防を行っている。

以上から、本研究によって抽出された術後せん妄ケアの様相は、看護師が認知機能の低下した患者の周辺状況を理解し、ケアの意図に基づき実践されているプロセスを示しているものと考える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 Fumiko Ishimitsu
２．発表標題 Team Approach toward Postoperative and ICU Delirium Care and Challenges
３．学会等名 The 2019 European Delirium Association meeting(Edinburgh)（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関